

小林弘依 「大地の響き」 (平成21年)

オピニオン

空、海、砂。写っているのはこの3つだけ。展示会場では一目見ただけで通り過ぎてしまうかもしれない。しかし、ひとたび足を止めて眺めると、シンブルな構図と色合いの中に豊かな自然の表情が見え始める。

撮影場所は鳥取砂丘。写真界の巨匠、植田正治(1913-2000年)が生涯モチーフとした「聖地」である。フォトアーティストの小林弘依も、数年前からその魅力にひかれ、何度も訪れてきたという。

撮影時期は1月末。「冬は観光客が少ないと思ったんですけど、人が多くて。砂に足跡がついたものしか撮れないのかなと

写○眼

空、海、砂…自然の表情

空、海、砂。写っているのはこの3つだけ。展示会場では一目見ただけで通り過ぎてしまうかもしれない。しかし、ひとたび足を止めて眺めると、シンブルな構図と色合いの中に豊かな自然の表情が見え始める。

撮影場所は鳥取砂丘。写真界の巨匠、植田正治(1913-2000年)が生涯モチーフとした「聖地」である。フォトアーティストの小林弘依も、数年前からその魅力にひかれ、何度も訪れてきたという。

は20年前、よりよい表現手段を求めて写真に転じたという。テーマは一貫して「いのちの記憶」。この言葉を個展の副題に

膨れ上がる医療費や相次ぐ療事故、それに医師不足。本の医療はがけっぷちに立っている。この先どこに舵をとったら医療崩壊か直れるのか。そのための「統合医療」かもしれない。

これまでの科学的な西洋と、漢方や鍼灸、カイロプラティック(整体療法)、どの東洋の伝統医学や代々とを統合して病気を予防これが日本統合医療学会で東大名誉教授の渥美和(81)が提唱する

集う

日本統合医療学会

小林弘依写真展「大地の響き—いのちの記憶—」 12月2日まで東京・神田小川町のオリソパシヤラリー東京で。カラー26点を展示。日休。☎03・3292・1934。来年1月14〜20日は大阪市西区のオリソパシヤラリー大阪、同28日〜2月2日は京都市中京区のギャラリー古都で開催。

残念に思っていたら、帰る日に神風が吹いて」。朝起きると、外は嵐のような天候だった。昨日までの足跡はきれいに消え、代わりに砂丘には美しい波紋が描かれていた。「人間にはできない造形。天地、自然が私の思いを聞き届けてくれたと思っ」。会心の一枚だった。

現代美術を手がけてきた小林

必ず使ってきた。今回の主題は「大地」である。むろん、生命は母なる大地ではぐくまれる。「抽象的な風景だけど大地のありようが秘められていると思っ」。地球、自然、自分のルーツとは…。眺めているといろんな思いが浮かんでくる。繰り返すが、写っているのは、空、海、砂である。(堀晃和)